

中国人日本語学習者の間接発話行為の理解 —慣習性と習熟度の影響—

李 璐 (名古屋大学大学院生)

玉岡 賀津雄 (名古屋大学)

要 旨

本研究では、慣習・非慣習性および日本語の習熟度が間接発話行為の理解にどう影響するかを検討した。まず、中国の大学で日本語を専攻する中国語話者の学生 47 名に対して、慣習・非慣習的な間接発話行為の理解テストを実施した。さらに、クローズテストで日本語の習熟度を測定して、下位・中位・上位の 3 群に分けた。分析の結果、(1)「使用の慣習 (conventions of usage)」および「言語の慣習 (conventions of language)」からなる間接発話行為 (Morgan 1978) の理解が、非慣習的な間接発話行為よりも正答率が高かった。(2) 日本語習熟度が学習者の間接発話行為の理解を促進した。ただし、慣習・非慣習的な間接発話行為の理解には、日本語習熟度が異なるパターンで影響しており、(3) 慣習的な間接発話行為は、中位群レベルまでに理解ができるようになったが、(4) 非慣習的な間接発話行為は、日本語能力の向上に伴って、下位群から上位群へと徐々に理解が進んだ。

キーワード：中国人日本語学習者、間接発話行為の理解、慣習性、習熟度

1 はじめに

間接発話行為 (indirect speech act) は、話し手の意図と表現の字義通りの意味が異なる発話行為である。たとえば、母親が子どもの起床を促す場面で、「もう 7 時だよ。」と言った場合、今が 7 時だということではなく、実際には「早く起きなさいよ。」という意味である。間接発話行為は、さらに、慣習的な間接発話行為と非慣習的な間接発話行為に分けられる。この慣習性の度合いによって、間接発話行為の意味解釈に必要な処理負荷も異なっていると考えられる。Gibbs (1981, 1986) および仲・無藤 (1983) は、母語

話者における間接発話行為の理解に要する反応時間を測定して、慣習的な間接発話行為のほうが非慣習的な間接発話行為よりも迅速に理解されると指摘した。

それでは、言語知識だけではなく、外国語の言語使用慣習の理解も要求されている外国人学習者の場合はどうなるのであろうか。英語を目標言語とする研究では、学習者の英語習熟度が間接発話行為の理解を促進すること、また、慣習的な間接発話行為のほうが非慣習的な間接発話行為より、正確かつ迅速に理解されることが示されている (Cook & Liddicoat 2002; Taguchi 2005, 2007 など)。ところが、日本語を目標言語とする学習者の研究 (萩原 2006; Hagiwara 2009; Taguchi 2008c, 2009a) は、非慣習的な間接発話行為のほうが慣習的な間接発話行為より理解しやすいという結果であった。しかし、これらの研究には問題がある。Taguchi (2008c, 2009a) では、調査協力者の母語が不統一であり、習熟度をテストで実測していない。萩原 (2006) および Hagiwara (2009) は調査の項目数が少なく、中級学習者だけを対象としている。そこで本研究では、これらの問題点を改善し、中国人日本語学習者を対象に、習熟度を実測して、慣習・非慣習的な間接発話行為の理解に対する影響を再検証することにした。

2 慣習的な間接発話行為と非慣習的な間接発話行為

間接発話行為の慣習性について、Morgan (1978) は、個人段階での習慣が社会全体に広がり、社会段階の共通知識になることとして捉え、この共通知識に基づいて、推論過程が省略できる可能性を「省略化された含意 (short-circuited implicature)」で説明した。さらに、Morgan (1978) は、慣習を「言語の慣習」と「使用の慣習」とに区別した。「言語の慣習」は、言語または少なくとも言語の一部を構成するものであり、「使用の慣習」はある目的のために使われることが慣習的な場合をさす。つまり、「使用の慣習」は言語知識の問題ではなく、社会・文化の問題である。そして、「使用の慣習」は「言語の慣習」になりうるとする。

これにしたがって、Taguchi (2005, 2008c) および張 (2017) は、慣習的な間接発話行為を、特定の言語形式、意味構造、談話パターンから話し手の

意図が理解できると定義した。英語の研究では、Cook & Liddicoat (2002), Taguchi (2005) および Takahashi & Roitblat (1994) は、Can you…? や Could you…? のような「できますか」と能力を聞くタイプあるいは Will you…? や Would you…? のような「～てもらえる」と意欲を聞くタイプを慣習的な間接発話行為と定義している。実際には、これらの表現は能力や意欲を訊ねるといふより、「依頼」や「申し出」の表現として定着している。日本語では、「～てもらえる」「～てくれる」のような表現 (仲・無藤 1983), 「あまり」「ちょっと」「どうも」などの副詞, 「かな」「かも知れない」「という気が」などの文末表現, 修辭疑問や中途終了文など, 理由や言い訳で断りを表す表現も慣習的な間接発話行為に含まれるとされている (Taguchi 2008c, 2009a)。

一方、非慣習的な間接発話行為は、複数の意味に解釈される表現であり、特定の文脈がなくては話し手の意図が分からない発話行為である。「コーヒーを飲むかい？」に対して、「コーヒーを飲むと目がさえるわ。」(この説明のオリジナルは、スベルベル & ウイルソン 1995, この訳は内田他 1999: 41) という答えがあったとする。たいていの場合は、起きていたくないのでコーヒーを飲みたくないという意味である。しかし、状況によっては、深夜まで残業するのでコーヒーを飲んで、目を覚ましておきたいという意味にもとれそうである。このように、発話の理解には、聞き手の推論による状況判断を含むので、非慣習的な間接発話行為は、慣習的な間接発話行為よりも処理負荷が大きいといわれている (Taguchi 2005, 2008c; 張 2017)。

3 外国人学習者の間接発話行為理解に関する研究と本研究の課題

外国人英語学習者の間接発話行為の理解について、母語背景の差異、理解のプロセス、目標言語環境での滞在期間、学習環境の違い、理解の正確さと速さが影響する要因など、多角的な視点から研究が行われてきた (Bouton 1988; Takahashi & Roitblat 1994; Ercanbrack 1994; Cook & Liddicoat 2002; Yamanaka 2003; Taguchi 2005, 2007, 2008a, 2008b, 2008d, 2009b など)。Cook & Liddicoat (2002) は、直接依頼、慣習的な間接依頼、非慣習的な間接依頼の3種類の理解テストを実施して、英語学習者と英語母語話者

を比較した。その結果、母語話者はすべての依頼行為をほぼ正しく理解したのに対し、習熟度の高い学習者は直接依頼、慣習的な間接依頼の理解は母語話者と同じ程度であったが、非慣習的な間接依頼の理解には誤りが多かった。また、習熟度の低い学習者は、直接依頼の理解はできたが、間接依頼の正答率は低く、特に非慣習的な間接依頼の理解はきわめて難しかった。Taguchi (2005) は、慣習的である間接断りと間接依頼、非慣習的な間接意見を、日本人英語学習者に音声提示し、間接発話行為の理解への慣習性と習熟度 (TOEFL-ITP の成績) の影響を考察した。その結果、「使用の慣習」としての間接断りと、「言語の慣習」としての間接依頼からなる慣習的な間接発話行為が、非慣習的な間接発話行為より理解されやすく、反応時間も短かった。また、習熟度は学習者の理解の正確さに影響したが、速さには影響しなかった。その他、Ercanbrack (1994), Taguchi (2007, 2008a, 2008b, 2008d, 2009b) なども学習者の英語習熟度が間接発話行為の理解を促進すること、また、慣習的な間接発話行為のほうが非慣習的な間接発話行為より、正確かつ迅速に理解されることを報告した。

日本語を目標言語とする間接発話行為の理解について、Taguchi (2008c, 2009a) は、慣習的である間接断り、間接意見、非慣習的な間接意見を学習者に音声提示し、理解の状態を考察した。その結果、正答率は、慣習的な間接断り、非慣習的な間接意見、慣習的な間接意見の順に低くなった。つまり、「使用の慣習」としての間接断りが最も理解されやすく、「言語の慣習」としての慣習的な間接意見は非慣習的な間接意見より理解され難かった。反応時間は、慣習的な間接断り、慣習的な間接意見、非慣習的な間接意見の順で長くなった。また、萩原 (2006) および Hagiwara (2009) は、60名のアメリカ在住の日本語中級学習者の直接発話、慣習的な間接発話、非慣習的な間接発話の理解を調査した結果、慣習的な間接発話行為のほうが非慣習的な間接発話行為よりも理解し難いことが分かった。つまり、Taguchi (2008c, 2009a), 萩原 (2006) および Hagiwara (2009) の調査結果は、学習者の間接発話行為の理解の正確さに及ぼす慣習性の影響が、英語の先行研究と逆の結果である。一方、張 (2017) の日本語の研究では、慣習的な間接不同意と非慣習的な間接不同意の発話場面を中国人上級日本語学習者に音声提示し、

正誤判断で学習者の理解の正確さと速さを調査したが、慣習的な間接不同意は、非慣習的な間接不同意に比べて、より正確で、より迅速に理解されることを示した。つまり、英語の研究結果と一致した。

Taguchi (2008c, 2009a), 萩原 (2006) およびHagiwara (2009) が日本語の間接発話行為理解の正答率に対する慣習性の影響について、他の研究と異なる結果を示したのには、以下の2つの理由が考えられる。第1に、Taguchi (2008c, 2009a) における日本語学習者の母語が不統一である。Bouton (1988) は、母語が異なるグループ間では、間接発話行為が生み出す含意の理解に差異があると指摘した。第2に、萩原 (2006) およびHagiwara (2009) では、慣習・非慣習的な間接発話行為の調査項目が、それぞれ4項目しかなく、項目数が少ない。また、日本語を目標言語とする先行研究の中で、萩原 (2006) およびHagiwara (2009) は中級日本語学習者を、張 (2017) は上級日本語学習者を対象としており、習熟度の影響を検討していない。Taguchi (2008c, 2009a) は習熟度を学年で検討した。しかし、学年が上でも習熟度が低いことはよくあるので、日本語能力を測るテストを使って、実測すべきである。

そこで、本研究では、中国語を母語とする日本語学習者に限定し、慣習・非慣習的な間接発話理解テストを実施して、両者を比較した。さらに、クローズテストを使って日本語能力を実測して、間接発話行為の理解に対する日本語習熟度の影響を検討した。

4 研究方法

4.1 調査協力者

中国の大学で日本語を専攻する中国語母語話者の2, 3, 4年生の合計47名を対象に調査を行った。平均年齢は20歳10カ月で、標準偏差は1歳2カ月であった。全員、日本に3カ月以上滞在したことがない。

4.2 間接発話行為の理解および日本語習熟度のテスト

4.2.1 間接発話行為の理解を測定するテストの概要

中国人日本語学習者による間接発話行為の理解を、慣習的な間接発話理解

課題12項目、非慣習的な間接発話理解課題12項目からなる四者択一のテストで測定した。この24項目のなかのいくつかの項目はTaguchi (2008c), 松見・森 (1995), スニサー (2001) を参考にして作成したものである。これにファイラー8項目を加えて、合計32項目のテストとした。具体的な間接発話文は、表1に示した。各項目は、場面の説明、2者の対話、そして4つの選択肢の質問からなる。2者の対話は、最後の文が間接発話文として設定されている。

表1 間接発話理解テストの構造

慣習性	番号	項目	間接発話文
慣習	1	断り	明日の朝、仕事あるから、早く起きない。
	2	断り	あ、俺の車は、家族しか保険をかけてないんだ。
	3	断り	最近、よく外食してお金使いすぎちゃったんだ。
	4	断り	あ、そうなんだ、今から7時まで、コンピュータの授業があるんだ。
	5	断り	明日かあ、考えとく。
	6	意見	そうね。私は、仙台は、あまり。
	7	意見	北海道かあ、今の季節、北海道はちょっと。
	8	意見	そうかな。
	9	意見	うーん、君の気持ちはよく分かるけど。
	10	依頼	あ、できれば。
	11	依頼	あ、やばーい、財布、家に忘れちゃった。お金、貸してもらえない？
	12	依頼	私、今週末、引越す予定なんだけど、手伝ってくれる？
非慣習	1	意見	また買ってきてくれれば。
	2	意見	僕だったら、85点取れれば、うれしいよ。
	3	意見	レストランが開けるくらいだよ。
	4	意見	その授業の担当の先生、私のことあまり好きじゃないって知ってるでしょう。
	5	意見	ああ、短い映画でよかったよ。
	6	意見	毎日疲れて死にそうだよ。
	7	皮肉	山田さんは本当に物覚えがいいのねえ。
	8	皮肉	私も今来たところだよ。たった2時間待ただけだから。
	9	不同意	この前も山田さんと一緒に、上手くできなかったからなあ。
	10	依頼	でも、留学説明会の冊子が欲しいなあ。
	11	誘い	そういえば、しばらくスキーしてないよね。
	12	誘い	そっかー。ねえ、おなかすいていない？

4.2.1.1 慣習的な間接発話理解課題

慣習的な間接発話理解課題は12項目からなる。項目1から5までは、理由や言い訳を述べて断りを表わす形式で、これらは日常的によく使われる社会・文化的に共通した談話パターンである (Taguchi 2008c)。これらの5つの項目は、Morgan (1978) が提示した「使用の慣習」に相当する。なお、

項目5の「考えておく」について、藤巻(1996)およびTaguchi(2008c)は、日本的な断り方の代表例であり、中国語話者が戸惑う日本語の表現の1つとして挙げている。つまり、表面的には否定的な意味はないものの、コミュニケーションにおいては否定的な機能を持つ「断りのサイン」である(藤巻1996)。依頼側の頼み事を引き受けるかどうかを考えると、はっきりと断ることができないので、断り保留の形を取り、断りの意図を間接的に依頼側に伝えていると考えて、「使用の慣習」として本研究の項目に選んだ。

項目6の「あまり」、項目7の「ちょっと」のような数量詞副詞は、ネガティブな意思表示としてよく使われる(Taguchi 2008c)。項目6については、「あまり」を文末で否定表現なしで使用した。「あまり」は否定形と共起するのが典型的な形式であり、否定の部分を明言しなくても、発話者のネガティブな気持ちが容易に予測される。項目7の「ちょっと」は、相手にかかる負担や相手に対する否定的な評価を表す際に緩和の方略としてよく使われる。項目8は、終助詞「かな」を含んで「そうかな。」の項目を設定した。「かな」は、躊躇を表す認識文末マーカー(epistemic sentence-ending markers of hesitancy)であり、日本語のネガティブな意見の特徴と考えられる(Taguchi 2008c)。「そうかな」は、相手の発言内容を受けた「そう」の後ろに「かな」がついて、相手の発言内容に不信、不同意を示す。項目9は、「けど」を含んだ「君の気持ちはよく分かるけど。」の項目である。「言いさし」表現で捉えられる「けど」は、話し手が自分の発話意図を言語化せずに聞き手にその意図を察してもらうことを目的としている。そのため、聞き手には、その言外の意図を読み取ることが期待される。これは、明言されない意図の伝達(朴2008)である。この項目もTaguchi(2008c)が指摘した否定的な意見を表す「部分的に賛成するストラテジー」および「中途終了文」の特徴に当てはまる。項目10は、「できれば」で終了する間接依頼の表現である。これは中途終了文で依頼の意図を相手に推察してもらうことを期待している。さらに、項目11と12の2つの項目を作成した。これらは、「～てもらえる」「～してくれる」の表現で、「要求」系依頼表現と「願望表出」系依頼表現である。主文として多用される。項目6から12までの7項目は、特定の言語形式や意味構造を持っており、Morgan(1978)が提示した「言語の慣習」に相当する。

4.2.1.2 非慣習的な間接発話理解課題

非慣習的な間接発話理解課題についても12項目を設定した。項目1から3は「ポジティブな間接意見」、項目4から6は「ネガティブな間接意見」の理解課題である。これら6つの項目は、良し悪しが明示されておらず、特定の言語形式や意味構造も持っていない。一見すると先行発話と無関係に思える発話で、間接的に自分の意見を示す。項目7と8は皮肉表現である。皮肉は、字義通りの意味と話者の意図的意味が正反対で、文脈に依存してはじめて解釈できる。さらに、項目9の間接不同意、項目10の間接依頼、項目11と12の間接誘いの合計4項目は、言語表現の制限があまりなく、ほのめかしのストラテジーで話し手の意図を表し、その解釈を聞き手の推論に委ねる表現である。

4.2.1.3 課題内容の長さや難易度の統制および選択肢の作成基準

以上の慣習・非慣習的な間接発話文の24項目は、2者間の対話の最後の文として組み込んだ。対話の流れの自然さを保証するために、言語学の知識を持つ3名の日本語母語話者に自然な対話の流れになるように修正してもらった。フィラーの項目も同じような形で、直接発話を8項目加えた。

12項目ずつの慣習・非慣習的な間接発話理解課題について、(1)対話のテキスト全体の文字数と(2)テキストに含まれる語彙の難易度を統制した。まず、文字数を慣習と非慣習で独立したサンプルの t 検定で検討した。その結果、有意な違いはみられなかった[$t(22) = .068, p = .95, ns$]。これにより、学習者の理解に対する慣習と非慣習の対話表現の長さ(文字数)の影響が統制されていることを確認した。さらに、対話のテキスト自体の難易度を統制した。リーディングチュウ太(<http://language.tiu.ac.jp/>)で、テキストに含まれる語彙の難易度を検索した。その結果、慣習と非慣習の対話で使われている語彙の難易度は、N2レベル以下の割合がそれぞれ88.9%、92.2%であった。これで、慣習と非慣習で使われている語彙の難易度が、ほぼN2レベル以下であることを確認した。

また、内容理解について、Taguchi(2005)を参考にし、4つの選択肢か

ら正解を1つ選ぶ形式の問題とした。正しくない選択肢として、正解の内容と「反対」である選択肢1つ、2者間の対話の「最後」の間接発話文のキーワードを含む選択肢を1つ、やり取りの「全体」の内容と関連する選択肢を1つ作るというパターンにした。上述した3名の日本語母語話者に選択肢の内容を修正してもらい、また正解が1つしかないことを確認してもらった。以下に理解課題の1例を挙げる。

【場面】 院生室で日本人の学生とイギリスからの留学生が話しています。

女の人：山田さん、今、時間ありますか？

男の人：あ、マリアさん、どうしたんですか？

女の人：これ、日本語で書いた期末レポートなんです。ちょっと急ですが、日本語をチェックしてもらえますか？

男の人：あ、そうなんだ。今から7時まで、コンピュータの授業があるんだ。

【四者択一の選択肢】

A 男の人は、マリアさんの日本語のチェックはすぐにはできません。

(正解)

B 男の人は、今からマリアさんの日本語のチェックをします。(反対)

C 男の人は、7時から、コンピュータの授業があります。(最後)

D 男の人は、日本語で期末レポートを書きました。(全体)

最後に、32組の2者間の対話の内容を、関東出身の日本語母語話者男女合計2人に発音してもらい、録音した。

4.2.2 習熟度を測定するためのクローズテスト

学習者の日本語習熟度を測定するために、小森・玉岡・近藤(2007)のクローズテストを使った。これは、増田光吉(1969)「アメリカの家族・日本の家族」の抜粋で、全585文字、86空所からなる。空所ごとに1点で86点満点である。小森他(2007)の信頼度係数は、 $\alpha = .95$ と高かった。

4.3 実施手順と採点方法

4.2で述べた2つのテストを中国西北地域のある大学の通訳実践教室で同時に行った。まず、学習者にクローズテストの質問紙を配布し、「漢字、ひらがな、カタカナのいずれか1文字を()内に書き入れて、文の意味が通るように、文を完成してください」と教示し、20分後に回収した。次に、学習者に間接発話行為の理解テストの質問紙を配布し、「以下の録音を聞いてください。録音は1回しか流れません。録音を聞いて、最もふさわしい選択肢を選んでください」と教示した。2つのテストの所要時間は約50分であった。ヘッドホンを使って他の日本語学習者の声が聞こえないようにして、全員に一度に課題を実施した。採点方法は、正答が1点、誤答が0点で、間接発話行為の理解テストは慣習が12点、非慣習が12点の合計24点満点(フィラー項目は採点外)であり、クローズテストは、空所ごとに1点として、86点満点で計算した。

5 結果と考察

5.1 間接発話行為の理解に対する慣習性と習熟度の影響

47名のクローズテストの結果は、最高点が73点、最低点が22点であり、平均は53.26点、標準偏差は11.17点であった。信頼度係数は $\alpha = .91$ と高かった。このクローズテストの結果にしたがい、47名の調査協力者をほぼ同人数になるように、下位・中位・上位の3群に分けた。下位群は22点から49点までの15人($M=40.33, SD=7.53$)、中位群は50点から58点までの16人($M=54.13, SD=2.36$)、上位群は59点から73点までの16人($M=64.50, SD=4.63$)とした。間接発話理解テストの習熟度別の平均と標準偏差は表2に示した。

表2 慣習性と習熟度別にみた間接発話理解の結果

慣習性	グループ	平均	標準偏差	最高得点	最低得点
慣習的	上位群 (n=16)	10.63	0.89	12.00	9.00
	中位群 (n=16)	10.19	1.28	12.00	8.00
	下位群 (n=15)	7.93	2.34	12.00	4.00
	全体 (N=47)	9.62	1.96	12.00	4.00
非慣習的	上位群 (n=16)	9.75	1.61	12.00	7.00
	中位群 (n=16)	8.25	1.65	12.00	6.00
	下位群 (n=15)	5.33	2.32	9.00	2.00
	全体 (N=47)	7.83	2.60	12.00	2.00

間接発話理解テスト (24点満点: 慣習が12点, 非慣習が12点満点) のクロンバックの信頼度係数 (N=47, $\alpha=.79$) は, 高かった。日本語の習熟度 (3群: 下位・中位・上位群) × 慣習性 (2種類: 慣習的・非慣習的) の二元配置の分散分析を行った。その結果, 慣習性の主効果は有意であった [$F(1, 88) = 25.05, p < .001, \eta_p^2 = .22$]。慣習的な間接発話行為のほうが非慣習的な間接発話行為よりも正確に理解された。また, 習熟度の主効果も有意であった [$F(2, 88) = 34.01, p < .001, \eta_p^2 = .44$]。シェフェの多重比較の結果, 下位群が中位および上位群よりも有意に得点が低く, 中位と上位群には差がなかった。なお, 習熟度と慣習性の交互作用は有意ではなかった [$F(2, 88) = 1.93, p = .15, \eta_p^2 = .04$]。

5.2 慣習性・習熟度が間接発話行為の理解を予測する決定木分析の結果

間接発話行為の慣習性と学習者の習熟度が間接発話行為の理解に及ぼす影響をより詳細に分析するために, 学習者が理解できたかどうか (従属変数) を, 日本語の習熟度別の3群 (下位・中位・上位群) および慣習性の2種類 (慣習的・非慣習的) の2つの変数 (独立変数) で予測する決定木分析を行った。なお, Taguchi (2008c, 2009a) の結果と比較考察するために, 慣習的な間接発話理解課題における「使用の慣習」(理由・言い訳で表す間接断り) と「言語の慣習」(特定の言語形式と意味構造) の下位課題を別々に扱った。習熟度が慣習・非慣習的な間接発話行為の理解に及ぼす影響を比較考察するために, 慣習性を最初の変数として指定した。分析の結果は図1に示した。

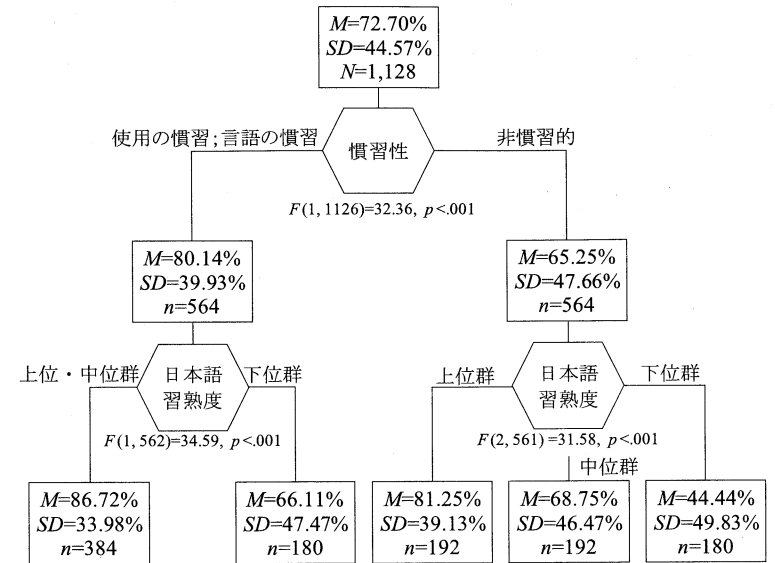


図1 間接発話行為の理解を予測する決定木分析の結果

決定木分析の結果, 「使用の慣習」と「言語の慣習」という慣習的な間接発話理解課題の結果が一つのノードになり, 正答率はほぼ同じであった。慣習的な間接発話理解課題 564 回答の正答率は 80.14%, 非慣習的な間接発話理解課題 564 回答の正答率は 65.25% で, 両者に 14.89% の差がみられた。分散分析の結果と同様に, この差は有意であった [$F(1, 1126) = 32.36, p < .001$]。さらに, 慣習的な間接発話行為の理解において, 中位群と上位群の正答率はほぼ同じ ($M=86.72%$) であり, 下位群 ($M=66.11%$) より有意に高かった [$F(1, 562) = 34.59, p < .001$]。一方, 非慣習的な間接発話行為の理解については, 下位群が 44.44%, 中位群が 68.75%, 上位群が 81.25% で, 習熟度が上がるにつれて正答率が高くなり, これらの正答率の違いも有意であった [$F(2, 561) = 31.58, p < .001$]。

5.3 考察

本研究では, 慣習と非慣習の2種類からなる間接発話理解について, 正確さを音声提示のテストで測定した。また, 中国人日本語学習者の習熟度をク

ローズテストで測り、3群に分けた。そして、学習者の間接発話理解に対する慣習性と習熟度の影響を検討した。さらに、習熟度別に慣習・非慣習的な間接発話理解の状態も考察した。その結果は以下の4つに要約される。

第1に、「使用の慣習」(理由・言い訳で表す間接断り)であれ、「言語の慣習」(特定の言語形式と意味構造)であれ、これらの特徴を有する慣習的な間接発話行為が、共に非慣習的な間接発話行為よりも理解されやすかった。これは英語・日本語母語話者の研究(Gibbs 1981, 1986; 仲・無藤 1983)、英語を目標言語とする研究(Cook & Liddicoat 2002; Taguchi 2005, 2007など)、日本語を目標言語とする張(2017)の研究結果と一致した。しかし、Taguchi(2008c)などは、慣習的な間接意見は非慣習的な間接意見より理解され難いとし、本研究および上記の先行研究とは異なった結果を示した。Taguchi(2008c)は、この結果を慣習的な間接意見として使われるある特定の言語形式は学習者にとって特に難しいことが原因だと説明した。しかし、日本語学習者の母語が不統一であり、日本語能力も学年を指標としており、テストによって実測していない。これらの研究の手続きが、結果に影響したのではないかと考えられる。そこで本研究では、これらの2点を改善して調査した。

中国語を母語とする学習者に統一した場合、慣習的な間接発話行為のほうが非慣習的な間接発話行為よりも正確に理解されることを実証した。これは、慣習的な間接発話行為が持っている特定の言語形式および意味構造が発話者の暗示的な意思表示と強く結びついており、また、理由や言い訳について使われる談話パターンも日中両言語間で共有しているので、学習者の理解が促進されやすかったと考えられる。なお、理由で間接断りを表す談話パターンが日中間で共有していることを指摘した先行研究は、王・山本(2015, 2016)が挙げられる。王・山本(2015)は、中国語話者と日本語話者それぞれの「申し出」「助言」「勧誘」「依頼」に対する断り行動を考察し、4つの断り場面において、機能的要素の使用率が「意思表示(断り)」および「理由」で上位2位であることを示した。「意思表示」という機能要素は直接発話であり、本研究の検討対象ではないので、考えないことにする。そこで、「理由」を述べるという機能要素についてのみ考えると、「申し出に対する断り」については、日本語話者が67.4%、中国語話者が91.9%、「助言に対する断り」

については、日本語話者が61.7%、中国語話者が81.6%、「勧誘に対する断り」については、日本語話者が76.1%、中国語話者が75.0%、「依頼に対する断り」については、日本語話者が91.3%、中国語話者が83.8%、という高い使用率であった。

第2に、学習者の日本語習熟度が強く間接発話行為の理解に影響した。これは、Cook & Liddicoat(2002)およびTaguchi(2005)などの結果と同じである。本研究では、間接発話行為の理解課題を音声で提示したので、学習者の日本語の語彙と文法の即時的な理解と反応が要求された。習熟度の高い学習者は、習熟度の低い学習者より、語彙と文法知識が豊富であり、語彙の意味と文法機能に迅速にアクセスすることができたと考えられる。習熟度の高い学習者は、間接発話行為の内容を的確に解釈し、関連のある情報だけを効率よく取り出し、四者択一の質問に正しく答えることができたのではないかとと思われる。

第3に、慣習・非慣習的な間接発話行為の理解には、日本語習熟度の影響が異なったパターンでみられた。慣習的な間接発話行為の場合は、中位群までにほとんどの言語形式および談話パターンが習得できると推察される。この結果は、日本語学習の早い段階で、慣習的な間接発話行為の特徴を教えることが学習者の理解を促進することを示唆している。「ちょっと」や「あまり」という言語形式は、ネガティブな意見と関係しやすい。このような特定の言語形式や意味構造と特定の発話内効力との関わりを明示的に指導することが有効であろう。また、理由・言い訳で表す断りの談話パターンについて、学習者に発話者の意図を分析することを意識させたり、母語と比較をさせたりすることで、学習者の理解の向上に貢献すると思われる。

第4に、非慣習的な間接発話行為の理解正答率は、学習者の習熟度の向上につれて下位・中位・上位群と順次伸びていた。これは、非慣習的な間接発話行為の理解プロセスに関連していると考えられる。非慣習的な間接発話行為は、字義通りの意味を理解した上で、文脈の推論によって理解されると考えられる(清水 2009)。学習者の習熟度が高くなるにつれて、非慣習的な間接発話行為の字義通りの意味理解ができるようになる。また、成人である学習者の言語能力が一定のレベルに達すれば、母語の基本的な推論能力を外国

語に適用することができるようになる。つまり、字義通りの意味と発話者の意図との間の関連性を見出すことが容易にできるようになると思われる。そこで、非慣習的な間接発話行為の理解を促進するためには、学習者の言語能力を十分に培うことが大前提である。言語能力が十分でない段階では、文脈情報などの手がかりを意識させることが重要だと考えられる。たとえば、イントネーションやポーズなどのパラ言語およびマナーなどの社会・文化的な常識を活用することが挙げられる。また、学習者にさまざまな間接発話の場面を提示して、間接発話行為の使用動機（たとえば：ポライトネス、皮肉、責任回避など）を理解させることも大切だと考えられる（Taguchi 2007）。これらの示唆が、日本語教育現場で活用されることが期待される。

参考文献

- 王源・山本裕子（2015）「親しい友人に対する断り行動の日中対照研究」『中部大学人文学部研究論集』34, 19-35.
- 王源・山本裕子（2016）「日本人と中国人は場面の捉え方がどのように異なるか—『助言』に対する断り行動を中心に—」『日本語教育研究』62, 82-99.
- 小森和子・玉岡賀津雄・近藤安月子（2007）「第二言語としての日本語の単語認知に及ぼす文脈の影響—二言語混在文の正誤判断における抑制効果の観察を通して—」『小出記念日本語教育研究会論文集』15, 7-21.
- 清水崇文（2009）『中間言語語用論概論—第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育』スリーエーネットワーク
- スニサー ウィッターヤーパーンヤーン（2001）「間接的発話行為の考察について—理解・表現を中心に—」『三田國文』34, 56-73.
- スベルベル, D. & ウイルソン, D. (1995) 『関連性理論—伝達と認知』内田聖二, 中達俊明, 宋南先, 田中圭子 (訳), 研究社
- 張麗（2017）「慣習性が学習者の間接発話行為の理解に与える影響—JFL 中国人上級日本語学習者を対象として—」『日本語教育』167, 31-45.
- 仲真紀子・無藤隆（1983）「間接的要求の理解における文脈の効果」『教育心理学研究』31(3), 195-202.

- 萩原明子（2006）「日本語での発話理解：第二言語話者と母語話者」『東京薬科大学研究紀要』9, 57-64.
- 朴仙花（2008）「現代日本語における接続助詞で終わる言いさし表現について—『けど』『から』を中心に—」『言葉と文化』9, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科, 253-270.
- 藤巻和代（1996）「中国語話者と日本人の日本語による『誤解』：断りの表現を中心に」『言語科学研究：神田外語大学大学院紀要』2, 143-156.
- 松見法男・森敏昭（1995）「外国人留学生における日本語婉曲表現の理解」『広島大学教育学部紀要 第一部（心理学）』44, 83-87.
- Bouton, L. (1988). A cross-cultural study of ability to interpret implicatures in English. *World Englishes*, 2, 183-196.
- Cook, M., & Liddicoat, A. J. (2002). The development of comprehension in interlanguage pragmatics: The case of request strategies in English. *Australian Review of Applied Linguistics*, 25, 19-39.
- Ercanbrack, J. (1994). Pragmatic competence in indirect speech acts: Assessing ESL learners' comprehension of indirect answers to questions. *言語文化研究 (松山大学)*, 14 (1), 35-59.
- Gibbs, R. W. (1981). Your wish is my command: convention and context in interpreting indirect requests. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 20, 431-444.
- Gibbs, R. W. (1986). What makes some indirect speech acts conventional? *Journal of Memory and Language*, 25 (2), 181-196.
- Hagiwara, A. (2009). Comprehending utterances in Japanese as a foreign language: Formulaicity and literality. In N. Taguchi (Ed.), *Pragmatic Competence* (pp. 227-248), Berlin-New York: Mouton de Gruyter.
- Morgan, J. L. (1978). Two types of convention in indirect speech acts. In P. Cole (Ed.), *Syntax and Semantics 9: Pragmatics* (pp. 261-280), New York: Academic Press.
- Taguchi, N. (2005). Comprehending implied meaning in English as a foreign language. *The Modern Language Journal*, 89, 543-562.

- Taguchi, N. (2007). Development of speed and accuracy in pragmatic comprehension in English as a foreign language. *TESOL Quarterly*, 41, 313-338.
- Taguchi, N. (2008a). Cognition, language contact, and the development of pragmatic comprehension in a study-abroad context. *Language Learning*, 58, 33-71.
- Taguchi, N. (2008b). The role of learning environment in the development of pragmatic comprehension. *SSLA*, 30, 423-452.
- Taguchi, N. (2008c). Pragmatic comprehension in Japanese as a foreign language. *The Modern Language Journal*, 92, 558-576.
- Taguchi, N. (2008d). The effect of working memory, semantic access, and listening abilities on the comprehension of conversational implicatures in L2 English. *Pragmatics & Cognition*, 16, 517-539.
- Taguchi, N. (2009a). Comprehension of indirect opinions and refusals in L2 Japanese. In N. Taguchi (Ed.), *Pragmatic Competence* (pp. 249-274), Berlin-New York: Mouton de Gruyter.
- Taguchi, N. (2009b). Corpus-informed assessment of comprehension of conversational implicatures in L2 English. *TESOL Quarterly*, 43, 738-749.
- Takahashi, S., & Roitblat, H. L. (1994). Comprehension process of second language indirect requests. *Applied Psycholinguistics*, 15, 475-506.
- Yamanaka, J. E. (2003). Effects of proficiency and length of residence on the pragmatic comprehension of Japanese ESL learners. *Second Language Studies*, 22 (1), 107-175.
- 日本語読解学習支援システム「リーディングチュウ太」<http://language.tiu.ac.jp/> (最終アクセス日：2018年6月5日)